

『近代浙江留日学生与中日文化交流』 についての感想

孫 安 石（神奈川大学）

今回の特集では、2025年8月21日から23日にかけて中国浙江工商大学で開催された「清末浙江留日学生群体研究」国際会議について、すでに複数の参加者による参加記が掲載されている。そこで本稿では、会議の際に頂戴した呂順長他著『近代浙江留日学生与中日文化交流』（浙江大学出版社、2024年）を取り上げ、その中のいくつかの論考を読んだ感想を簡単に記しておきたい（図1、図2参照）。



（左：図1表紙，右：図2目次）

目次

- 第一章 近代浙江率先官費派生留学日本
- 第二章 求是書院首批留日学生
- 第三章 浙江百名師範留日学生
- 第四章 清末浙江湖州籍留日学生
- 第五章 清末端安籍留日学生
- 第六章 清末浙江留日学生的人数及其構成
- 第七章 章宗祥的留日経歴及其帰国早期的活動
- 付録一 清末浙江留日学生明録
- 付録二 帰国留学生考試被授出身の浙江留日学生（1905年-1911年）

日中関係史の重要な一部をなす中国人留学生と日本との関連を取り上げた多くの先行研究が発表される中で、とくに研究の深化が見られる部分の一つが、中国の各省を単位とした中国人留学生と日本との関連を取り上げた研究であるといえる。ところが、本書は、中国国内においても最も多くの留学生を派遣した浙江省出身の留学生に関連する豊富な資料を取り上げながら、従来の研究以上に増して精緻な研究を進めている。

本書の第1章においては、浙江省で最も早い時期に当たる1897年、日本に派遣された杭州蚕学館の留学生関連の記事が同時代の『農学报』、『時務報』などに紹介されていることに触れ、杭州からの留学生派遣には当時の杭州知府林啓に日本への留学生派遣を進めた羅振玉と孫淦の功績が紹介されている。そして、杭州蚕学館の学生として嵇侃と汪有齡が日本に派遣される経過などが汪康年の書簡と『農学报』の記事、そして彼らが在籍した『日華学堂日誌（1898～1900年）』の記録によって明らかにされている。

ところが今回の論考ではさらに一步踏み込み、彼ら二人が日本で勉強したとする「梅清処塾」（山本

憲によって開塾、号は梅涯）関連の資料が「高知市立自由民権記念館蔵」の山本憲関係文書に依拠して記述されている。さらにこの山本憲関係文書によって同処で勉強した人物として康有為一族の康有儀、康同文の他、複数の清国からの留学生がいたことも取り上げている（11頁～15頁）。

次の第2章では、日本の外務省外交史料館の史料を駆使して、杭州求是書院から派遣された留学生と彼らが日本で勉強した「日華学堂」の教育過程と彼らの試験成績、そして、彼らが中心となり組織した「訳書彙編社」、「教科書編輯社」の活動が検討されている（40頁）。

第3章では浙江省の最も大きく留学生派遣の特徴とも言える師範教育部門において派遣された留学生の一群のことを「浙江百名師範留日学生」という呼称でまとめている。清末の新政と教育改革が進展する時期である1905年、浙江省の師範教育を担う教員養成を目的として派遣された100名以上の留学生は、主として日本の早稲田大学清国留学生部などに在籍し、科学・地理・博物・化学などを学んだ。その後、帰国した彼ら・彼女らは、浙江省や上海の師範学堂などでさまざまな教育活動や教科書の翻訳活動に従事することになる。こうした留学生たちの帰国後の経歴を追跡する作業は、中国側の史料と研究によってはじめて可能となるものであり、きわめて重要な研究方法の一つであると言えるだろう（71頁～83頁の表）。

第4章と第5章は、浙江省出身の留学生をさらに湖州と温州に細分し検討している。浙江省の湖州地域は江南の主な穀倉地帯で、湖州商人は豊かな経済的な基盤を背景に、日本への留学生派遣にも積極的な役割を果たし、日本の外務省記録や清末の『官報』などが記録する籍貫などを丁寧に拾えば（118頁）、少なくない湖州出身の浙江省留学生がいることがわかる。その研究によれば、なかでも湖州のうちの烏程県、歸安県、吳興県の出身が多く、彼らは早稲田大学、宏文学院、成城学校など勉強する他（131頁～135頁）、1910年代に入ると、日本の工業学校に在籍した湖州出身の学生らによって湖州地域の工業発展を目的とする同窓会までを組織し、同年には『浙湖工業同志会雑誌』を創刊したという（137頁）。

温州府からの留学生を取り上げた第5章では、とくに瑞安県から日本に派遣された留学生に注目し、そのきっかけを作った人物として、「瑞安学計館」を創立した孫詒讓の活動を紹介している（180頁）。清末の瑞安県ではとくに、林と許の氏を名乗る一族の日本留学が多かった事例が紹介され、瑞安県の留学生は雑誌『浙江潮』の編輯に参加したほか、1903年の「抗俄運動」に関連しては「温州留学生警告同郷書」などの文書を発出し、中国の愛国運動をリードしたという。温州出身の留学生が中国への帰国後、学校教育を含め各種の文化活動に従事した中、とくに、農業教育に力を注いだ人物として許璇が取り上げられている（202頁）。紹介によれば、東京帝国大学にて農学を学んだ許璇は、1913年に帰国した後、中国の農業経済学のために尽力し、卓越した成果を残したという。その他にも瑞安出身の留学生は、軍事や実業分野においても著しい成果を上げていた。

以上、浙江省と浙江省の府県の中国人留学生の状況についての最新の中国側の研究成果を紹介してきたが、ここで一つ疑問が無いわけでもない。それは中国人留学生がいただいていたであろう「愛国」、または「近代化」という熱情を果たして、中央と地方、または国家と地域（省、府、県）というレベルで明確に分けることができるのだろうか、という疑問である（孫安石・大里浩秋編『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、2019年を参照）。また、浙江省の籍貫分布によって温州府331名、杭州府220名、紹興府210名の順に分け、さらに細かく地方県に分けたことで府県の中国人留学生の日本留学の特徴と帰国後の活動を計量化することは量的には可能であっても、質的な測定までは困難である。そうであれば、中国人留学生史の研究を過度に細分化することは警戒すべきであり、やはり各省別の特徴を述べることにより説得力があるのではないか、とも思える。